
アリスは童話の国のおひめさま！？

cherry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスは童話の国のおひめさま!?

【Nコード】

N5853R

【作者名】

cherry

【あらすじ】

アリス、本の中の世界にいきたいと思っではいけないよ？

アリスは、祖母が亡くなって寂しい気持ちを、彼女宛ての手紙を毎日書くことで紛らわせていた。

そんなある日、いまでは習慣になった手紙を書いている途中に、眠ってしまっ。

その夢の中で目が覚めると、上から兔のぬいぐるみが落ちてきて・・・？

おばあちゃん。すいません、私おばあちゃんとの約束破
っちゃったみたいです。

始まりは兎の人形から

拝啓 おばあちゃん

おばあちゃんは どうして いますか？ 私は 元気で やつて います。

最近、おばあちゃんの 残して 行つた 荷物を 整理して いたら、小さい ころにおばあちゃんが 私に 読んで くれた、 童話の 絵本が 沢山 見つかりました。

どれも 懐かしい のですが、 一番 好き だった 笑う 猫とか、 時計を 持つて 走る ウサギが 出てくる 絵本が なくて ちよつと さみしく なりました。

確か、その 絵本の 主人公の 女の子は 私と同じ 名前を して たんですね。

おばあちゃんが 私に 『アリス』 という 名前を 付けた 理由が わかる 気がします。

前におばあちゃんも そのお話が 好きだ と 言っていました ものね。

でも 私の 毎日は 相変わらず 部活の 練習に 追われて いて 物語の中の 『アリス』 の ようには 刺激の ある ことが なく、 ちよつと 退屈 です。

それが 原因 なのか、 その 物語の 主人公に なれたら、 なんて ことを 思う ように なり

最近はおばあちゃんとした約束を破ってしまいそうで怖いです。

おばあちゃんはなんで私にあんな約束をさせたんでしょうか？
おばあちゃんはもしかして物語の中の世界に入ったことがあるんでしょうか？

・・・そんなことあるはず不是吗ね。馬鹿なことを書きました。
どうかお元気で。

あなたの孫、アリスより

なんだか甘いにおいがする。

お菓子？花？

ともかく、どっちにしろ、とても気持ちのいいにおいだ。

それにつられてとろとろ瞼を開けると、桜の花びらのような薄いピンク色が目の前に広がっていた。

壁でもない、空でもない、ただただ、綺麗なピンク。

体も変な浮遊感に包まれていて、またまた眠くなってくる。

再び目をつむって夢の中に逃げようとした、そのとき。

『 姫様。 』

凜とした、鈴の鳴るような可愛らしい声が耳をうった。

だれ？・・・でもきつと人間違えだ。

だって、私は姫じゃない。

そんな御大層な人間ではない、ただの女子高生。

一瞬だけ意識を覚醒させたその声を心の中で否定して、また夢の中に逃げようとする。

それでも、そんなことはお構いなしに声はしつこく続く。

『 姫様、 姫様、 私たちの 姫様。 起きてください。 』

・・・うるさいなあ、だから違うってば・・・。

『 姫様。 起きてください。 』

しつこい・・・。

『 アリス 姫様。 』

え？

『 アリス 姫様、 起きてください。 』

私の名前……
なぜだろう。なぜ私の名前を知っているのだろう？
なぜ私のことを姫様と呼ぶのだろう？

疑念はみるみるうちに胸の中で大きくなっていき、ついには完全に私の朦朧としていた意識を覚醒させた。

「だれ？」

そう呟きながら目を開けると、起き上がる間もなく上から何か物が落ちてきた。

それは、ポフツ、と音を立てて私の顔に当たる。

別に痛くはなかったが、何かと思って、手で持ち上げ、起き上がりながら見てみると

それは精巧な作りの白いウサギのぬいぐるみだった。

上にはちょこんと黒いフェルトでできたシルクハットをかぶり同じくフェルトでできた赤いポンチョを着ており、そのポケットには小さな懐中時計が入っている。

「きれい……。」

時計をポケットから取り出して、手に乗っけて眺めて見ると、金色のふちが光を反射してまるで朝日のように、明るくきらきらと輝く。ついつい、その美しさに見とれてみると、すぐ近くでさっきの涼やかな声がした。

『アリス姫様。それ、ぼくの時計です。返してください。』
……ぬ、ぬいぐるみがしゃべっている。

およそ信じられないことに、声のした方へ顔を向けると

先ほど自分の顔に落ちて来たあのウサギのぬいぐるみが、ぽんぽんときているポンチョを手で払いながら立ち上がり、嫌そうに顔をしかめて言葉を発したのだ。

「……ぬいぐるみにも表情ってあるのね。
びっくりしすぎて変なことに気づてしまったじゃないの。」

「あ、あなた……ぬいぐるみよね？」

『いかにも。まあ、この世界ではの話ですが。それより、時計を返してください。』

「え？ああ、そうね。ごめんなさい。……はい、どうぞ。」

ちよこんと差し出された、布の兎の可愛らしい手に、小さな時計をそっと置いてあげると

器用につかんでポンチョのポケットにするんとそれを滑り込ませた。いったい、あんな指も付いていない布の手でどうやったたらこんな難しい動作ができるんだらう、と思わず頭に疑問が浮かぶ。

しかし、それは兎が次に発した言葉ですぐに別の疑問にすり替わる。

『すみません。この時計はとても大事なもので……
姫様でも触れさせるわけにはいかないのです。』

「あのさ、ちょっと聞いてもいい？」

『はい、なんででしょう？』

「なんで、私が姫様なの？それに、あなた、なんで私の名前を知っ

ているの？」

「……もちろん、聞きたいことはほかに山ほどある。なぜ、ぬいぐるみがしゃべっているのか。なぜ、自分はこんなおかしな場所にいるのか。」

でも、一番聞きたいのは、自分のことを姫様と呼ぶ理由。自分の名前を知っている理由だ。さつきからそれが一番気になっていた。

『……』

「ねえ、お願い教えて。」

沈黙がじれったくなって、思わず兎に答えをせかすと

ふっと、ふいに兎が皮肉げな笑みを顔に浮かべた。

『答えは、すぐに嫌でも分かります。』

いま暫し、姫様は自分の世界におもどりください。』

愉しげな、それでいて静かな声があたりの空気に響いた瞬間、目の前の世界が兎もろとも、ぐわん、と歪む。

ぐちゃぐちゃに混ざり合った景色の中、手を伸ばすと

くすくす

気持ちの悪い笑い声が耳に届き、それと同時に一気に意識が闇に沈んだ。

アリス、本の中の世界に行きたいと思ってはいけないうでなけりゃ、性悪な白兔に変な世界へ連れ込まれてしまうんだ。

始まりは兎の人形から（後書き）

はい、始めました新連載。

受験勉強終わったので、前から進めていた小説を連載してみました。

まだ高校がありますが、がんばるのでよろしくお願いします。

まだまだ分かんないところもあるかもしれませんが、これから色々とかかしていきたいと思います。

感想も宜しくお願いします。

目覚めと記憶

「んう……」
朦朧とした意識に、ぼんやりと見えるいつもと変わらない卓上の景色。

机の上に広げていた腕をどけると、見慣れた便箋と封筒があった。

いつの間に寝ていたんだろう。

おばあちゃんへの手紙を書いているときに寝るなんて自分でもわからないほどに疲れていたんだ、きっと。

それにしても……

頭が痛い。

まるで金づちで殴られているみたいにかんがる。

いったい、さっきのは何だったんだろう。

右手で痛むこめかみを押さえながら思う。

夢？

それが一番当てはまると思うけど、ちょっとだけおかしいとも思う。夢にしてはリアルすぎるのだ。

あの不思議な空間にいるとき、体の感覚もあったし、五感がすべて働いていた。

何よりあの浮遊感がいまだに体に残っている。

たまに似たような夢を見るけど、今回はそのどれよりも現実味があつた。

そして、どれよりもおかしな点が多かった。

しゃべるウサギのぬいぐるみが出てくるとはねえ、しかも、姫様、とか言われたし……

いま考えて見ても、相当奇妙だと思う。

まあ、でも思い当たる節がないこともない。

きつと、おばあちゃんの遺品を整理していたときに見つけた、懐かしい絵本と一緒に思い出した記憶が原因だ。

小さい頃、おばあちゃんをよく絵本を私が寝る前に読んでくれた。両親を早くに亡くして、夜もさみしくて眠れない私を安心させるために、よく動かない手で絵本のページをめくりながら慣れない読み聞かせを優しい声で毎晩毎晩してくれた。

『白雪姫』に『赤ずきんちゃん』、『ロミオとジュリエット』などの名作は勿論、ほかにもいろいろな話をしてくれた。

そんななかでも、おばあちゃんが特によく読んでくれたのは……なんだったか、名前は忘れたけど、笑うピンクの猫だったり、ぶつぶつ時計を見ながら両足で立って走る兎が登場したりする、とても非日常な世界に迷い込んだ女の子が主人公の絵本だった。

おばあちゃんはその物語が大好きで、私にその絵本を読んでくれるたびにほっこりと、しわくちゃん、でもほかのおばあちゃんと比べたらまだまだとっても綺麗なその顔をほころばせて言っていた。

アリス、可愛いアリス。おまえの名前はおばあちゃんの大

好きなこの絵本の主人公の女の子と同じなんだよ。

私も、そう聞きたびになんだか、自分の名前がとてもきらきらした
すごいものに思えて、おばあちゃんが好きなその物語を、どんだん
好きになっていった。

長らく忘れていたこの記憶。

その記憶を無理やり引っ張りだすような、絵本の山をつい先ほどい
きなり見つけたんだから仕方がない。

思わず、この退屈な、色の無い日常から抜け出したいと思った。

おばあちゃんのよくしてくれた、あの非日常な世界に入り込みたい
と思った。

でも、そんなのダメなのに、そんなのいけるわけないのに。
きっとおばあちゃんの『約束』はこういうことだったんだと思う。

アリス、本の中の世界に行きたいと思ってはいけないよ。

ああ、思い出すたび、なんでか胸がざわざわする。
嫌な、とつても嫌な感覚。

まるで、大切なものがすっと知らないうちなくなっていくような・・・

大丈夫、おばあちゃん。私はそんなあほなこと思いません。
第一、本の中の世界になんていけるわけないじゃないですか。

心の中でおばあちゃんとの『約束』に返事をして、なんとか胸のさざ波を鎮めようとしたとき

『本の中の世界行けますよ?』

可愛らしい、誘惑者の声でした。

目覚めと記憶（後書き）

はい、色々と至らない点もありますが、とりあえず2話目です。

読みにくい点や、感想などあつたらお聞かせください。

そして、余談ですが、高校に合格しました。

はい、とんでもない私ごとでスイマセン。

ともかくこれからはがんばるのでよろしくです。

時計の音につられて……

『本の世界行けますよ?』

ふいに響いてきたどこか聞き覚えのある声に、はっとして足元を見ると、机の影からその声の主が現れた。

黒いシルクハット。赤いポンチョ。

もうそれだけで、あの白兔だと分かる。

あたしは夢を見ているのかしら?

そう思つて頬を右手で思いつきりひっぱてみたら痛かった。

『アリス姫様、本の中の世界行きたいですか?』

嘘よ!?!嘘よ!?!嘘よね!!

なんでこいつがここに居るわけ?

「な、なんであなたがここに居るわけ!?!私つてはまだ寝てたの?」

『はは、御冗談はよしてください。姫様はちゃんと起きてますよ。』

いや、こっちは至つて本気だ。

これは幻影なのか?

快活そうに笑う兎のぬいぐるみを見て、私はめまいがした。

「なんか……、色々倒れそう……」

思わずそう呟くと、ぬいぐるみの顔が途端に曇った。

『それは大変です!!姫様ご無理をなさつてはいけませんよ。』

いや、あんたのせいだから。

「はぁ・・・もう大丈夫だから。それより、さっきも聞いたけど、なんであなたがここにいるの？」

ため息交じりに聞くと、今度はすごい真剣な顔に変わった。

ぬいぐるみのくせに、表情豊かなのね・・・。

ホントに、不思議なくらいくるくる変わる。

きつと、人間でもここまではつきり、しかも早く、色々違う顔に変わる人はなかなかいないと思う。

『はい、僕は童話の国から姫様を迎えにまいりました。』

「は？童話の国？つか、思ったんだけど、私姫じゃないわよ？」

『いえ？姫様は姫様ですよ？まあ、私たちの国のほうはきて見れば分かると思いますので』

「姫様、眠ってください。』

「え？」

何か言う暇もなくぬいぐるみは自分のポンチョのポケットの中からあの金色の懐中時計を持ちだして

その金色の鎖を短く持ち、時計の部分を私に向けてゆっくりと横に揺らし始めた。

そんな古風な・・・

カチ、コチ

カチ、コチ

でも、なぜか小さいはずの時計の針が動く音がとても大きく聞こえる。

カチ、コチ。

あれ？

なんでか

頭がぼーっとする。

カチ、コチ

ぼやける視界の中で白兎を見ると、うつすらと小さく笑っていた。

あんたって・・・、ほんと性格悪いわね・・・

そう思ったが最後、目の前が黒く塗りつぶされた。

おばあちゃん、もしかして性悪白兎って、あのぬいぐるみ

のじゃですか？

見知らぬ部屋で目覚めるのはまだしばしば後のじゃ……

寝ぼけたアリスと目覚めの兎

カチ、コチ

カチ、コチ

カチ、コチ

時計の音が、頭の中で壊れたラジオのように繰り返される。

カチ、コチ

カチ、コチ

ほんとに・・・うるさい。

なんて、耳障りな音。

それと同時に、ある記憶がよみがえる。

金色の時計が、前にぶら下げられていてゆっくりと、ゆっくりと左右に揺れる。

それを持っているのは・・・誰だったけ？

そうだ・・・白いうさぎのぬいぐるみ。

ああ!!

そこまで思いだした途端いままでの記憶が全部頭に流れてわたしはガばつと目を覚まして跳び起きた。

そしてまた頭をひねることになる。

視界に入ってきたのは、なんとも広くて高級そうな部屋の姿。

ちよ、ここどこ？

ざっと見渡した感じ、ちょっとしたパーティー会場にも見えそうだ。ブラウン調で揃えられた、クローゼット、イス、化粧台、テーブル。それらが部屋の左右の壁に寄せられるように、バランス良く配置されて

いて、囲まれるように真ん中にはどでかい、ゆうに十人はすわれそうな白いソファが

幾何学模様の綺麗な絨毯の上にドドンと構えている。

まじで、ここどこ？

頭をひねってもひねってもその答えは出ない。

もしかして、私いきなりお嬢様になったとか。

……いや、ありえない。

そんな漫画のような話あってたまるか。

でも、もしそうでなかったら

私はなんでこんな凄い部屋にいるんだろう。

よく見てみれば、私のいまいるベッドの上にある、私の脚を包んでいる布団や毛布もかなりの品物だ。

とっても手触りがいいし、なによりふわふわしている。ホントになんでこんなところにいるんだろう。

本日三回目となる疑問が頭を駆け巡る。

顔をしかめて、困った顔をしていると

ふいにベットの右側の、これまたシックな木彫の扉が

トン、トン

と小さく音を立てた。

「姫様。入ってもよろしいですか？」

扉に阻まれくぐもっているけど、聞き間違いのような
あの声。

「……どうぞ。」

かすれた声で告げると

きいー

という不気味な音を立てて、扉が開いた。

……だれ？

現れたのは、すらっと長身の白いタキシードを着た美青年。

透き通る白い肌に、緋色の切れ長の瞳。

形のよい唇は、緩く弧を描いていて、優しい笑みをたたえている。
それらを包むように、肩から流れる白銀の髪。

あのウサギのぬいぐるみとは似ても似つかないちゃんとした人間だ。
どうしよう……ついに五感がおかしくなってしまった。

そのせいか次に見えたのは、その美青年の頭の上から生えている

うさぎの・・・耳、だった。

なぜに、うさぎの耳？

かなり要らない要素だと思うんですけど。

漫画やアニメにしか出てこないほどのイケメンに兎の耳ってかなりバランスの崩壊した組み合わせだ。

っーか、兎の耳をつけてるってことはこの人、もしかして変態じゃないか？

どうやら五感おかしくなったのにつれて私の頭もおかしくなってます。まったらしい。

変な妄想の嵐が頭を駆け巡る。

「あの・・・姫様？大丈夫ですか？」

気遣うような優しい声ではっと我に返る。

いつの間にか、兎耳の美青年は部屋に入って私の乗っているベットの前でしゃがんでいた。

私の顔をのぞく、心配そうに眉が寄せられた顔を見て思わず謝罪の言葉が口をついて出る。

「えっと・・・スイマセン？」

なんだろ

語尾が疑問形になってしまった。

って・・・なんで私謝ってたんだろう。

狐につままれたようなわけのわからない気持ちになっていると

それが、表情に出たのか、さっきまで心配そうに曇っていた目の前の顔が

「……ぷっ」

と笑いで噴き出す音とともに、心底楽しそうに破顔した。

「姫様は……まだ夢から醒めていらっしやらないようですね。」

「いや、一応起きてるけど。」

悪戯っぽく、立ち上がりながら向けられたからかいの言葉に頭の隅で百万ドルの笑顔ってこのことじゃないのかしらと考えながら反論する。

「そうですか。では改めまして、おはようございますアリス姫様。」

「ああ、おはよ……うん？」

言葉を返そうとして感じた違和感。

あれ……？なんだろう？

何かがつつかかる。

あ、そうだ。

この人、いま私のことを『アリス姫様』って呼んだ。

てことは……

「あなた、もしかしてあの兔のぬいぐるみ？」

「さすが、姫様。そうですよ。私があぬいぐるみです。」

私はこのとき思った。

神様。

世の中には不思議な事があるものなんですね。

寝ぼけたアリスと目覚めの兎（後書き）

感想、誤字脱字報告待っています、（＾o＾）

驚愕と絶望

「姫様、具合はどうですか？」

「いや、別に大丈夫だけど。」

それよりも、あんたがあのお兔のぬいぐるみだつてことにビックリだわ。

「ねえ、あんたどうしてぬいぐるみになったり、人間になったりしてんの？」

「ああ、それはですね、姫様の世界とこちらとを行き来するためですよ。」

「は？」

はたまたクエスチョンマークが頭に推定百個くらいならば。

おいおい、意味分かんねー事ばかりだな。

どうやら、私の理解力はこの世界に来てから急速に衰えたらしい。

「えっと……、もっと詳しく説明してくれないかしら？」

こめかみを揉みながらそう聞くと、不意に『白兔』が

パチン、と指を鳴らした。

その瞬間、何もなかった目の前に突如と大きなホワイトボードが現れる。

「何これ!!! どうやったの!？」

「魔法の一種ですよ。この世界は、いわば魔法で成り立っていますから。」

この手の魔法は、『ニ デイア』と言って、必要なものを頭で思い浮かべるだけでそれが出るんです。

だせるものには、魔力によって個人差がありますがね。」

なんとまあ、どうしよう、本当に漫画の世界に来てしまったようだ。

「ねえ、あなたなんて言うの?」

ふと、大事なことを思い出して聞くと、『白兔』はまたまた楽しそうに笑った。

ホントよく笑うなあ・・・

こうしてみると、どこかの国の王子様見たいだ。

その王子様が、私に向かって恭しく膝を折って胸に手をあげてこうべを垂れているんだから不思議だ。

「はは、いまさらですわ姫様。では、改めまして僕の名はチェイス・ハイルトンと申します。」

以後、アリス姫様に執事として使えさせて頂きます。お見知りおきを。」

「いや、もう知ってるから。」

じゃあ、チェイス。もう一回聞けけど、なんであなたは色々変身したりしてんの?」

「はい、それを説明しようと思いましたが、これを用意したんですよ。」

そう言っつて、チェイスがまた指をパチンとならすと、ホワイトボードの上に二つの丸と文字が次々と描かれていく。ホント、まじで便利だと思う。

どつりで、マーカーペンがないわけだわね・・・

食い入るようにボードの画面を見つめる私をみて、チェイスがおかしそうに喉をクツクツと鳴らして笑う。なんだか馬鹿にされた気分だけど、仕方がない。実際私は何も知らないのだ。

「まず、こちらが姫様の世界、この対するのが私たちの世界とします。」

ボードに描かれている、右の丸、左の丸を順に指さしてチェイスが言う。

そして、次にその間にある一本線をさして続ける。

「そして、この間にあるのが、『ゲート』。いわゆる、両界を分かつ扉兼フィルターのようなものです。」

私たちがこの『ゲート』を通るには、向こうの世界に行くのにふさわしい姿に自らの形を変えなければなりません。まあ、僕の場合、それが兎のぬいぐるみだったってことです。もちろん、なかには姫様のような例外もいますが、相当の魔力のあるものだけです。」

「え？じゃあ、もしチェイスとかがそのままゲートを通ろうとしたらどうなるの？」

「ああ、それは肉体もろとも吹っ飛びますよ。もしくはそのままどこか別の世界に飛ばされて彷徨うことになります。どの道危険ですね。」

「そ、そう……大変なのね。」
ぐ、グロい……。

肉体吹っ飛ぶとかどんだけだよ……。

つて、あれ？

疑問が一つ。

「ねえ、じゃあ、そんなに危険なゲートなら、なんで私はそのまま通っても大丈夫なわけ？

あんた、さっき私は例外って言うてたわよね。」

「それは、姫様だからですよ。今はまだ自覚されていませんが、もとと姫様は膨大な魔力の持ち主なんです。ためしに何か魔法を使ってみますか？」

魔力？魔法？

向こうの世界では、絶対に聞かないような単語が頭をぐるぐると巡る。

ていうか、答えになっていない。

これじゃあ、象をさして「なんで大きいのか？」と聞いたときに「象だから」と答えられたようなもんだ。

それでも、『魔法』を使う、という言葉には少し胸が躍る。

「ほんとに？私でも使えるの？」

「ええ、コツさえつかめれば。それにこの世界に置いて魔法を使えないということは命取りになりますからね。基本的なものはむしろ覚えておいた方がいいでしょう。」

「へえ〜。・・・ねえ、じゃあその魔法とやらを覚えたらあっちの世界にも帰れる?」

口に出した途端にチエイスの表情が曇る。しかしそれを隠すように、儂げに笑う。

今までの笑顔とは全然違う『微笑み』。

「ええ、帰れることには帰れるんですが・・・、今の姫様には多分無理かと思えます。空間を移動する魔法は相当な魔力を要するので、僕でも一年に一回使えるかどうかですから。」

「それって、もしかして・・・。」

言葉は続かず、そのままチエイスが一番聞きたくないことを言う。

「はい・・・。姫様は、当分いや、下手すれば一生もこの世界には帰れません。」

絶望の淵、私を突き落としたのは

優しく儂げな笑みをたたえたあなたでした。

姫の暴走

姫様は、下手すれば一生帰れません。

今なお、儚げに微笑んでいるチエイスの顔と一緒に、先ほど彼から聞いた言葉が頭の中で何度も何度もこだまする。

心臓をいきなり押し掴みにされたような衝撃からやっこのことで搾りたしたのは、自分で聞いていても笑えてくるような、そんな情けない声だった。

「ゴメン、チエイス。……ちょっと一人にしてくれる？」

「……はい。」

「下手すれば一生帰れない……か。」

チエイスが出て行って誰もいなくなった部屋の中、ベットに寝転がりながらつぶやいた言葉は一層空しく聞こえる。簡単に帰れないということは分かっていたけれど、まさか一生なんてことは全然考えていなかった。

しかも、私をこの世界に連れてきたのはほかならぬチェイスだし・
・
自分の中にある感情をどう表したらいいのか分からなくて、とりあ
えずゴロリと寝がえりを打つ。
視界に入ってくる揃えられた家具と大きいはずの空間は、なぜかと
ても狭苦しく感じる。
まるで檻だ。

悲し・・・くはない。怒りを感じているわけでもない。
かといって楽しいわけでは絶対ないし・・・。

本当に、この世界に来てから分からないものが一気に増えた。

もう、分からないものだらけじゃない・・・。

考えるのに疲れて、柔らかな布団に顔を埋めれば意識が遠のいてい
く。
夢の世界へ引き込まれる前に浮んだのは、さっきまで「怖い」と感
じていたはずの、チェイスの心底愉しそうな笑顔だった。

あれは・・・本当に微笑んでいたの？

・・・まさか！！

けれども音の正体に思い当り、脳天に五寸釘をうちこまれているような頭の痛みを振り切って部屋を飛び出し、急いで階段を最上階まで駆け上がる。

その階にあるただ一つの部屋の扉を乱暴にけり飛ばし、中に突っ込むと、布団の羽毛が飛び散り、大きく穴のあいた壁の横で、無残にも木片と化したベットのの上に清藍の繭に包まれて宙に浮いているアリスの姿を確認してチェイスの顔から血の色が引く。

もともと白い彼の肌は、いまでは白を通り越してもはや青に近い。

っこれは・・・

目の前で、光に包まれ浮んでいる少女の瞳は死んだ魚のように濁っている。

魔力の暴走。

この世界では数百年間起きたことのなかった事態だが、それはそもそも魔力が溢れだして暴走するほどに魔力を持った人間がいなかったゆえの事。

だが、歴代の統治者を遙かに凌ぐ魔力を秘めているアリスの話となればそれは別だ。

しかも、この世界に連れてこられたばかりの少女は自分自身の力を制御できないばかりか、そんな恐ろしいほど大きな力が自分の体の中に存在することすら知らない。

くそっ、完全に俺のミスだ。
普通なら、アリスの心がもう少し落ち着いてから話すべきだったの
に。

心が不安定な今、魔力がその影響をうけることは、少し考えれば分
かることだった。

このままじゃ・・・姫様が危ない！！

漏れ出した魔力は目に見えるほど強く、それは持ち主の命さえも削
り取る。

青色の光は弱まる気配もなく、焦って近づけばその濃厚な力に、胸
が押しつぶされるような衝撃を受ける。

「くっ・・・なんて力だ。」

何とか前に進んで光の繭に手を伸ばせば、触れる寸前にバチッとい
う音と、焼かれるように激しい痛みが体を駆け走る。

これが漏れ出した分のみの魔力のなすことなのだから、本当に眠っ
ている分を考えると心底恐ろしい。

「うっ・・・くっ・・・。」

それでもなお、少女に触れようと激痛をこらえながら繭のなかに手
を入れ、アリスのせいで力なく浮んでいる体から垂れている手首
を掴むと

「……や、め……て。」

そう、アリスが呟いた。

そしてそのまま、濁った輝きのない瞳から涙があふれて、それはポタリ、ポタリと頬を、服を伝ってチエイスの手に落ちる。

「……なん、で……。」

魔力が暴走している状態で意識が戻ることなどあり得ないのに。ましてや、しゃべるなんて……。

この少女は……なんなんだ？

思わず痛みも忘れて、やっとのことで掴んだ細い手首を放す。得体のしれない怖ろしさに駆られて光の繭から離れて後ずさると、それを待っていたかのように、少女は目をつぶった。

その瞬間、青い光はまるで今まで暴れていたのが嘘だったかのようにその色を段々と薄め、少しずつアリスの胸に吸い込まれていくように収まっていった。

「……っと、危ない……ふう。」

青色の光が完全に収まり、空中から落ちてきたアリスが地面にぶつかる前に慌てて抱きとめると、その寝顔を見てチエイスはホッと胸をなでおろした。

腕の中でコテンと首をかしげたまま昏々と眠る白い顔は、微笑を誘うほどあどけない。

さきほど泣く前に見せた、無感情に見えるはずなのに激しく哀愁を感じさせる表情とは似ても似つかなくて、その訳の解らなさにチエイスは一人苦笑した。

本当に、今回の姫はよくやってくれる……。

……先が思いやられそうだ。

抱えている少女を起こさないように慎重に抱き直すと、銀髪の青年は静かに部屋を後にした。

姫の暴走（後書き）

知っている人はお久しぶりです、知らない人はこんにちは、作者の cherry です。

さてさて、本当に読んでくれている方には五か月も待たせてしまつてスイマセン！！と地面に頭をこすりつけて謝りたい所存でございます。

いや、もう本当にスイマセン……。

言い訳としましては、学校の忙しさが半端じゃないということなんです……。

はい、これも全部私めがへたれであることに起因しています。

どうやったら趣味と学校生活を両立できるんだろう……うう。

時間の使い方が分かりません。

というわけで、これからも更新は亀の後方100メートルを爆走していく速さで行っていく思われますので、どうか温かい目で見守ってもらえると嬉しいです。

では、何時になるか分かりませんがまた次話で！！（＾・＾）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5853r/>

アリスは童話の国のおひめさま！？

2011年12月28日23時48分発行